

巻 頭 言

歴史に学ぶ里山

(認特) 大阪自然史センター／兵庫県立大学大学院 緑環境景観マネジメント研究科 梅 原 徹

もう 40 年以上前の 1973 年から 10 年ほど、箕面川ダムの建設にともなう自然の保全対策にかかわった。その際、ダム地域の自然に対して（故）吉良竜夫先生は、この地域の自然はみかけ上、府下に多い里山と変わらないにもかかわらず、他地域よりも豊かな生物相を保持しており、潜在的な自然の回復力を保っているがゆえに高い評価が下せるとされた。また、その理由として、古くは滝安寺や勝尾寺の寺領、その後は国有林の比率が高かったので、一般の里山ほどつよい収奪を受けずにすんだことが大きな原因とされた。言葉を換えれば、一般の里山には豊かな生物相、自然は残らなかったことになる。

近年、里山ほど人口に膾炙した言葉もめずらしい。最近では当初の定義だった農用林に限らず、田畑や住居も含めた田園景観を里山と呼ぶのがふつうになった。人が自然と上手に折り合いをつけながら、長年にわたって築きあげてきたのが里山という評価も定着したように思えるが、はたしてそれは正しいのか。

1986 年、大阪自然環境保全協会が自然保護シンポジウム「里山の保全と活用」を開催された。当時 30 代後半の若造だった私は、今や鬼籍に入られた高橋理喜男、四手井綱英、藤本浩之輔などの大先生にまじって、話題提供することになった。大阪の二次林組成の現状しか手持ちのネタはなく、箕面での経験があったにもかかわらず、自然が持つ基本的なシステムを壊さない範囲で利用してきたのが本来の里山だと、つい口走ってしまった。

このシンポジウムのせいではないだろうが、以後、里山はブームになったものの、布谷知夫氏が KONC 会誌 24 号の表紙の言葉に書かれたように、自然と人間のかかわりを突き詰めるということにはつながっていかず、研究より、保全活動や行政施策の対象となることが多くなった。里山は美しく懐かしい自然としてしか捉えられなくなり、里山の何を、何故残す必要があるのかが議論されていないという指摘は正鵠を射ている。

里山がマスコミに頻繁にとりあげられ、広く知られることによる効用もたしかに大きい。しかし、里山の自然保護には、現状の把握とともに、それぞれの成り立ちについての知識が必須だと思える。そうした理解に役立つのが歴史史料、古文書や絵図などである。これらには古い時代の山野の利用や資源をめぐる争い、土地利用や植生型が記録されていることが多い。問題はその存在が自然の研究者にはあまり知られず、知り得ても読めないことが多いことだろう。

近年、歴史学者と共同で、古文書や絵図を活用して過去の自然を復元する試みがふえてきた。里山、とくに西南日本のそれは江戸時代、ほとんど森林の体をなしていないが多かったようだ。

私も一昨年、今から 300 年余り前の元禄 2 (1689) 年に製作された大きな絵図を見ることができた。この絵図は箕面川ダム地域に接し、豊かな生物相のバックボーンとして機能してきたと評価された勝尾寺の寺領を含む広域のもので、寺領に隣接する村々との境界を立会いの下、奉行所が定めた結果を明示したものである。勝尾寺の寺領境界に

は後年になって発見された八天の石蔵という四天王、四明王の銅製仏像が納められた石室があるが、その位置も正確に示されている。幾何補正すれば、現在の地形図にも載せられるほどの出来である。この絵図は地形表現が巧みであるとともに、当時の植生型がていねいに描き分けられている。

現在、この地域の多くは山林に覆われ、山麓では里山の保全活動が盛んだが、300年前には集落近郊の丘陵地の多くが禿山として示され、寺領以外の山林もかなりの部分が草地で、森林にはマツらしき姿がまばらに示されているにすぎない。勝尾寺の寺領はさすがに緑濃く、樹木の密度も高く描かれているが、本来の自然林である広葉樹らしき姿はない。寺領でも山間の谷筋はほとんど畑地として示されており、現在の姿とはまったく違っている。

勝尾寺領の植物資源をめぐる隣接村落との争いが殺人事件にまで発展したことを有岡利幸氏の著書「森と人間の生活―箕面山野の歴史」から知ることができるが、里山の緑肥の確保は稲作にとっ

て、それこそ死活問題だったことがうかがえる。人と自然が折り合いをつけながら持続的に利用してきたとする里山像は、人口密度の低い一部地域を除いて、ほとんど幻想である。

西南日本の里山の自然回復は、人の利用がなくなったことに加え、温暖で適当な降水に恵まれた気候風土に裏打ちされた、つよい回復力に支えられたといえるだろう。もちろん、収奪の過程で失われた種群もあっただろうが、わずかでも残されたソースが回復にかなりの機能を果たすことは確からしい。近年の、もと里山における菌従属栄養植物の増加傾向をみると、里山の放置があながち不都合とも思えない。

里山の何を、なぜ、どのように保全すべきなのかは、歴史を学び、地域ごとに考えるしかないと思う。それが地域の自然の特徴や、生物多様性を守ることに繋がると信じる。

30年余り前の発言をずっと後悔している私は、ここ10年ほど、植物生態保全論という講義で、懺悔を続けている。